

受験番号
（ 採用数字 ）

## 二〇一六年度ソワニエ看護専門学校一般入試（二次）試験問題

（ 解答は、全て解答用紙へ記入しなさい。特に指示のない限り、答えの末尾に「。」を付け足す必要はない。また特に断りの無い限り、同じ選択肢を二度使うことはない。 ）

I 次の四字熟語に関連のある語句を後の語群より選んで符号で答えなさい。

- ① 乾坤一擲 ② 付和雷同 ③ 羊頭狗肉 ④ 夏炉冬扇 ⑤ 馬耳東風

《語群》

イ 看板倒れ    ロ 尻馬に乗る    ハ 無用の長物    ニ 当たって砕ける    ホ 犬に論語

II 次の空欄に動物に関する漢字一字を入れて、慣用句を完成させなさい。

イ（ ）脚を現す    ロ 角をた矯めて（ ）を殺す    ハ 立つ（ ）    跡あとを濁さず    ニ（ ）猿の仲    ホ 窮鼠（ ）をか噛む

III 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

自殺は敗北である。そのことにかんずるかぎり、私は結論をためらわない。だが、敗北とはなにか、なんに對しての敗北かということになると、私には明確なものはない。日本の降伏が決定した日、その日のうちに、いくたりかの人が私の周囲で、それが当然の義務であるかのように自決した。その人たちの図式には、いかんともしがたい事実として敗北がまずあり、なんのためらいもない行動がそれに続いた。自決そのものを敗北とする発想は、その人たちにはなかったのである。自決という表現をコバミ、自決という言葉を選んだその人たちにとって、それはあくまで自己決定の行為だったのである。私には、その人たちの発想に、どんなかたちでも立ち入る意志はない。

降伏が決定した直後の数時間が、岐路の選択を迫られた唯一の時間であった。前線でも後方でもない真空地帯<sup>注2</sup>だけが、その決定を強いられた。前線は決定が終わっており、後方は決定の主体そのものが崩壊していた。最高統帥部とも、またすでに絶望的な戦闘状態に入っていた北正面と東正面の戦闘部隊とも断絶したままで、その決定をトウケツせざるをえなかった、関東軍将兵の苦悩を思わないわけにはいかない。もつとも緊張した数日ののち、コウチヨクした決意と、脆弱<sup>せいじやく</sup>な思惑<sup>しごく</sup>のなかで、各人の処断にゆだねるというかたちで一切が放擲<sup>ほうてき</sup>され、堰<sup>せき</sup>を切ったような混乱がそのあとに続いた。そして私は残った。自己を決定して残ったのではない。その人たちの明確な図式から、単純にとり残されたのである。だが、生き残ったという事は重大である。生き残った者にとって、生き残る機会は、さらに無数にやってくる。一度生き残ってしまったら、要するにどんな屈辱のなかでも、ついに私たちは生きのびるのである。ソ連軍がいつせいにソ満国境を越えたとき、ハルビン市内にどこからとなく、大量の青酸カリが放出され、手伝えに日本人婦女子へ渡された。しかしそのひと月後、進駐して来たソ連軍将兵の連日の凌辱<sup>りやうじやく</sup>のなかで、青酸カリを飲んだ婦女子があったということ、少なくとも私は聞かなかった。

ここでは生存ということが、むしろ敗北なのだ。死にざまから生きざまへの転換は、無残なまでに不用意である。生きざまへ居直る瞬間からおよそ

いかなる極限も、そのままの位置で日常へなりおおせる。なぜあるとき死ななかつたのかという、怨みのようなものだけが、残るものとしてそのあとに残る。それが生きざまというものである。

しかし自殺は敗北であるという本来単純な発想から、だがそれは敗北の終結であるという飛躍へは、ほとんどどれほどのキヨリ⑤もないはずである。そして敗北だけが敗北を終結させるというこの背理が、ついに自らをつらぬきえずに終わるとき、敗北はその位置で石化する。屈辱はそのときから始まる。背理はかならずつらぬかれねばならない。(石原吉郎「オギーター」より)

注1 真空地帯Ⅱ内務班(下士官の居住区) 注2 背理Ⅱ論理に反していること

問1 傍線部「①」⑤」のカタカナは漢字に、漢字は平仮名にそれぞれ直しなさい。

問2 波線部「A」と「B」が言わんとするところを、文中からそれぞれ漢字二字で抜き出して答えなさい。

問3 二重傍線部「I」の「一度生き残ってしまったえば、要するにどんな屈辱のなかでも、ついに私たちは生きのびるのである」の例が書かれているところがある。その部分の終わりの五字(句読点は含まない)を抜き出して示しなさい。

問4 二重傍線部「II」の「敗北だけが敗北を終結させるというこの背理が、ついに自らをつらぬきえずに終わるとき」を別の言葉で表現してあるところがある。それはどの部分か、十字で抜き出し、その頭の五字で示しなさい。

IV 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

そうしたある日の午後、利休は、自分の点前てまえで信長公の御前で茶を賜っている一人の武将を、ふしぎな感動で見詰めていた。坂田郡長浜城主羽柴藤吉郎秀吉というこの人物に、その名前こそ時折りは耳にしていたが、利休は今まで格別の興味を持ったことはなかったし、注意を払ったこともなかった。まだ四十になるかならぬ無名に近い一武将だが、いま利休の前に現れたこの新しい人物は、利休の知っているいかなる武将よりも勝①れていた。見るからに器量抜群であった。

挙措きよそ動作も静かであり、表情も穏やかで、口のきき方も、他の武人のように角ばったところはなく、**あ**武士らしからぬ優しささえ持っていた。

**い**、風姿のどこかに一点犯すべからざる威厳を自然に具そなえていた。茶を喫する態度も、誰たれから茶を習ったのか法に適②い堂々たるものであり、茶器に対しても恐ろしいほどの眼め利きであった。信長が先年堺すさの教寄者から買い上げた茶器名宝を、(中略)そつなく褒ほめ称③え、それらが卑しき堺の町人どもの手から天下に号令せんとする主君信長の手④にキ④したことをそれらの名宝のために慶賀すると述べた。

利休は、何ものにも臆おそさないこの若い武人に大きい感動をもって見惚みほれるように見入っていたが、

「お眼利き、奇特に存じます」

と、ただ一言静かに言った。言う気持ちはなかったが、思わず口からスベリ出した言葉であった。言ってから、利休ははっとした。相手の心臓に短刀を刺し込んだような気持ち、自分の言葉から感じたからである。う、利休はこのとき初めて、自分がこの秀れた武人を烈しく憎んでいることを知ったのである。

瞬間、秀吉の眼が利休を見た。無感動な眼であった。利休の言葉を額面通り素直に取って悦ぶ眼でもなければ、嵩にかかった利休の言い草に対して怒りを含んだ眼でもなかった。利休は相手が自分という人間に対して何ものをも認めていないことを感じた。強いて言えば利休を見入った相手の眼は全く無感動で、ひどく冷たいものだった。

え、秀吉の眼が利休を見入らなかったならば、利休の心は傷つかなかったかも知れない、しかし、利休の刺のある言葉が相手はつきりと感じた証拠には、秀吉の視線はかなり長い間——そう利休は感じた——利休の面から離れなかったのである。

茶坊主が何か言いおった——そういった歯牙にもかけない無心なほど冷たい眼であった。そして利休から視線を外した後の秀吉の態度は頗る慇懃であった。

利休は、そうした秀吉の自分を見た眼と同じものが、先刻から茶器を見、道具を見、軸を見ているのを感じていたのだった。この眼は秀吉という人物の持つて生まれて来た眼であるに違いなかった。自分とも茶の世界とも無縁な、遠く隔たった眼であった。永久に交叉することのない全く異質の眼であった。智謀と武力と権勢以外、決して何ものをも認めることを知らない眼であるに違いなかった。謂ってみれば大俗物の眼であった。利休は生まれて初めて自分にとって敵と言い得る人間の眼というもののあるのを知ったのである。(井上 靖「利休の死」より)

問1 傍線部「①」⑥」のカタカナは漢字に、漢字は平仮名にそれぞれ直しなさい。

問2 部「あゝえ」に入れるにふさわしい語を次から選び、番号で答えなさい。

- 1 そして      2 もし      3 むしろ      4 しかし

問3 二重傍線部「A」に「相手の心臓に短刀を刺し込んだような気持ちを、自分の言葉から感じた」とあるが、これは自分の言葉に自分自身の何を感じたからか。次の中から、最も近いと思われるものを選んで、符号で答えなさい。

- イ 軽薄さ      ロ 大胆さ      ハ 尊大さ      ニ 卑屈さ      ホ 頑固さ

問4 二重傍線部「B」の「歯牙にもかけない」の意味を、本文中で別々に使われている漢字二字を使って熟語(下に「する」を付けることができる)として答えなさい。

問5 二重傍線部「C」で、利休が秀吉の眼を「自分にとって敵と言い得る人間の眼」とまで言っているが、なぜ「敵」なのかはこの文からだけでは分からない。利休が秀吉の眼に「敵」を感じた理由が分かる一文を抜き出して、その頭の五字を示しなさい。

V 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中に<sup>①</sup>ある人とすみかと、またかくのごとし。  
生きてはく  
絶えることはなく  
玉を敷いたように美しく立派な  
 ……たましきの<sup>④</sup>都のうち、棟(のき)を並べ、葺(いらか)を争へる、あるいは身分の高い、あるいは身分の低い高さ卑しき、人のすまひは、時が経っても世々経て<sup>②</sup>尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。あるいは去年焼けて今年作れり。あるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中(うち)に、わづかにひとりふたりなり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、<sup>③</sup>ただ水のあわにぞ似たりける。

問1 二重傍線部「イ」「ロ」の読みを現代仮名遣いで記しなさい。ただし、「きよねん」「あさ」は認めないものとする。

問2 傍線部「①」～「⑤」を、前後の文脈に合わせて現代語訳しなさい。

VI 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

【前半部分解説】武城は孔子の弟子である子游が代官として治めている町。その武城で、弦歌の声(琴の音色と歌声)が聞こえて来た。それは、国を治める上で、孔子が重んじている「礼楽」によってこの町が治められている証拠であった。孔子は、「鶏(こんな小さな町)を割く(治める)の」にどうして牛刀(礼楽)を使う必要があるのか」と笑いながら言う。

子<sup>①</sup>之<sup>ニ</sup>武城<sup>ニ</sup>、聞<sup>ク</sup>弦歌<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>声<sup>ヲ</sup>。夫<sup>注2</sup>子<sup>注3</sup>莞爾<sup>トシテ</sup>而笑<sup>ヒテ</sup>曰<sup>ク</sup>、「割<sup>キ</sup>鶏<sup>ヲ</sup>焉<sup>イハシ</sup>用<sup>ニ</sup>牛刀<sup>ヲ</sup>。」子游<sup>②</sup>対<sup>シ</sup>曰<sup>ク</sup>、「昔者<sup>注4</sup>偃也<sup>ヤ</sup>、聞<sup>ク</sup>諸<sup>注5</sup>夫子<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、『君子<sup>ニ</sup>学<sup>ブ</sup>道<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>愛<sup>シ</sup>人<sup>ヲ</sup>、小人<sup>ニ</sup>学<sup>ブ</sup>道<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>易<sup>シ</sup>使<sup>ヒ</sup>也。』子<sup>注6</sup>曰<sup>ク</sup>、「二三子<sup>ヨ</sup>、偃<sup>注7</sup>之<sup>注8</sup>言<sup>ハ</sup>是<sup>注9</sup>也。前<sup>注10</sup>言<sup>ハ</sup>戲<sup>シ</sup>之<sup>注11</sup>耳<sup>ト</sup>。」

注1 武城 || 地名 注2 夫子 || 先生 注3 莞爾 || 先生 注4 完爾 || 先生 注5 完爾として || につこりと 注6 偃 || 子游の名 (論語 陽貨第十七より)

問1 傍線部「①」～「④」の読みを現代仮名遣いで書きなさい。

問2 二重傍線部「前言」が指示する部分はどこか。文中より抜き出し、その冒頭の漢字二字で答えなさい。

問3 太点線部「偃之言是也」を現代語訳しなさい。